

## 「資料紹介」 京都女子大学図書館所蔵『神野寺縁起絵巻』

—— 甕速日命遷座伝承の縁起絵巻化 ——

中 前 正 志

京都女子大学図書館が所蔵する『神野寺縁起絵巻』(188.5/Ko78)は、数年前に臨川書店を通じて購入されたもので、冒頭部に印影「九曜文庫」(陽刻長方形朱印)が見られ、もと同文庫(中野幸一氏)の蔵書であったと知れる。小稿は、右絵巻について、若干の考察とともに大方の紹介を行おうとするものである。末尾に、詞の箇所と絵の箇所の影印とを掲げた。後者の方は、臨川書店より提供頂いた、同書店発行『古書特選善本目録』通巻25号(奈良絵本・絵巻特集号、平成25年11月)所載写真のデータに基づいている。

さて、『神野寺縁起絵巻』は、卷子装写本一軸、縦三・二×全長約四三〇糎。表紙は薄茶色蜀江錦文様入緞子装。詞と絵それぞれ三段で構成されており、詞第一は十八行、詞第二は十九行、詞第三は七行。詞の箇所は紙本、絵の箇所は絹本である。外題・内題など見られず、新しい桐箱に「神野寺縁起絵巻」と印刷された紙片が貼付されている。奥書の類は一切ない。前出臨川書店発行目録が、絵について「良質な顔料、金泥を用いて美麗且つ精巧に描かれており、専門の画工の手によるものと思われる」と述べ、「江戸中期写」とする点、妥当なところであろう。管見の限り、他に

伝本が知られず、また、同類の内容を描いた絵巻も見当たらない。江戸中期に下る写本とはいえ、そうした稀観の書として相応の意義を有するものと言えよう。

詞第一の冒頭七行ほどは全体の序とすべき部分で、仏法が伝来して以来、代々の天皇が都としてきた大和国では、それに対する崇敬が殊に厚かった、と述べる。そのあとに、「茲に髮生山神野寺の来を考に」（詞第一7〜8行）としたうえで、充分に把握し難い面もあるが、およそ次のような内容の物語を展開している。

・ 持統天皇十年（六九九）、鹿島明神（武甕槌命）が母・甕速日命のいる大和国添上郡春日野にて共に居住することになったところ、甕速日命が甚だ美麗であったため、鹿島明神に付き従っていた舎人が見初めて、恋慕の思いを深く募らせていった。甕速日命は、身に危害の及ぶことを恐れて、春日野の里を密かに出ることにした。

（詞第一後半）

・ 住み慣れた春日野を離れた甕速日命は、人も通わないような深山幽谷に住もうと、三笠山の傍らを通って木暗く険しい山路を進んだが、そのことを聞き知った舎人が走り追ってくるのだった。命が先を急ぐと、舎人は大いに怒り大蛇となって追いかけて、髮生川の辺で間近く迫った。意を決した命は剣を抜いて大蛇を切り殺し、ずたずたに掻き散らしたという。その後、甕速日命は髮生山の頂きに住み、女が入山することを許さなかった。それで、その山に登ることを今でも恐れて、麓の里の川で手を洗い口を漱いで明神を拝するのである。そのため、この里を伏拝村と称し、そこには手水川という川が流れているのだ。

（詞第二）

・ その後、聖武天皇の時代になり、天平二年（七三〇）に安倍親王が重病に陥った際、陰陽博士の大津連が、神野明神（甕速日命）と鹿島明神の祟りであって、法薬によらなければ治病は難しい、と占った。

（詞第三）

詞第一後半〜詞第二は、有名な道成寺説話の男女を入れ換えたような内容の一連の伝承。「鹿嶋大明神」（詞第一9

行目)は、常陸国鹿島神宮の祭神・武甕槌命であつて、通常は神護景雲二年(七六八)に奈良の春日神社に藤原氏の氏神として迎えられまつられたとされる。伝承の主人公は、その武甕槌命の母・甕速日命で、同命が「髮生山」(詞第二四行目)の頂きに遷座することになった経緯を物語る。髮生山の麓が「伏拝村」であることを最後に伝え(詞第二八～一九行目)、全体が同村の地名起源伝承ともなっているのだが、現在の奈良県山辺郡山添村伏拝に神野山<sup>1)</sup>があつて、その山頂近くに髮生山(法性山)神野寺が所在すると共に、山頂には、燐(槌)速日命あるいは甕速日命の塚と伝わる王塚もある。絵巻に言う「髮生山」とはこの神野山であつて、「髮生山神野寺」(詞第一八行目)も右の神野寺のことと違いない(前出臨川書店発行目録も指摘する通り)。ただ、髮生山の近くにあることになる「髮生河」(詞第二一二行目)や伏拝村にあるという「手水川」(詞第二一九行目)については、今のところ確認し得ていない。なお、神野山は、春日野から東南東に約十五kmの地点にある。

詞第三に「神野明神」(五行目)がやや唐突に出てくるようであるが、詞第二において、甕速日命が住むことになつた髮生山について「彼山上へは今に登ることを恐て、多く麓の里の流にて手洗口漱、明神を拝し奉りける」(一六～一八行目)と記されるのと対応しているのであつて、髮生山<sup>2)</sup>神野山に遷座した「明神」甕速日命が、「神野明神」であるに違いない。大東急記念文庫所蔵の康暦二年(一三三〇)写『大般若経』の奥書に「大和州山辺郡東山内神野山大明神」と見えることが指摘されており、甕速日命であるか否かはともかくとして、早くより神野山に「明神」が祀られていたことは確認し得る。詞第三は、その神野明神<sup>3)</sup>甕速日命と鹿島明神<sup>4)</sup>武甕槌命の崇りの伝承を記載する。詞第一後半<sup>5)</sup>詞第二が、甕速日命を中心とする彼らの遷座伝承であつたのに続く、遷座後の崇りの伝承である。崇りの対象は、「安倍親王」(一行目)。聖武天皇の第一皇女で、後の孝謙(称徳)天皇である。「天平二」(二行目)年の時点ですでに「春宮」(一行目)であつたと捉えられているが、史実としての立太子は、天平十年のことである『続日本紀』。崇りの

理由は示されていないが、「安倍親王」が女性として始めて皇太子になった人物であって、そうした人物が神野明神の祟りを受けることと、神野明神が「反く口惜ものは女なりと思取て、夫より女を入ることをゆるさせ給は」（詞第二15く16行目）なかったということには、連関するところがあるのだろうか。「大津の連」（4行目）は、『懷風藻』に詩が二首載ることでも知られる、陰陽師の大津首。天平二年三月に、その術を弟子に伝習せしめることを許されている。

\*

前出臨川書店発行目録は「本書に記述されるような縁起の記述は見出せない」とするが、詞第一後半以降の全体と基本的に共通する内容が、春日大社の二種の社記、鎌倉末期写とされる春日大社所蔵『春日御社御本地并御託宣記』と永享九年（一四三七）写の尊経閣文庫本が最古写本である『春夜神記』（共に『神道大系』神社編「春日」収載）に見られる。前者の場合、「神野大明神根源」と題して詞第一後半く詞第二に対応する記事、それとは別の離れた箇所に詞第三に対応する記事が各々見え、後者の場合は、「神野大明神御事」と題する項目の前半部に、詞第一後半く詞第三全体に対応する記事が、ひと続きの一連のものとして見られる。それら記事は、次の通り。

・鹿嶋大明神、持統天皇五年<sup>卯辛</sup>、所々令尋御所給。同十年<sup>壬申</sup>添上郡春日野<sup>天</sup>母御神共御坐。其形甚美麗御。而舍人依奉思係。女身<sup>御</sup>、口借者也、我登深山高峯<sup>天</sup>、令出行給時、彼舍人御共<sup>天</sup>追走参<sup>ル</sup>。而如飛鳥令行給時、舍人発悪心成大地走参。髮生河辺<sup>ニシテ</sup>以劍切彼大地斬殺了。其後髮生山頂住給<sup>リ</sup>。所謂

一宮 武雷命

二宮 母御神 賽速日命

三宮 舍人 水權明神也

斬大地劍名曰鹿正劍、又名天靈劍、已上

聖天大王御子安倍親王春宮御時、天平二年十二月三日、御惱付御、依勅宣召陰陽師、大津速令、七日精進、令占天申云、「十死一生御病也」ト申。重依宣旨、尚令占申云、「高大神・鹿嶋明神御崇也。不説経力難免御煩」ト

占申リ。而又占申云、「奉講講讀最勝王経、講讀者其靈驗御歎」申。因茲以七大寺惣檢校僧都行信并僧四人、已上五人請位、件件最勝王経奉講讀問御平諭。仍以同十七日、髮生山頂奉崇祭、每年二季為恒例、上件最

勝王経奉以講八講々讀。同十二年建立神野寺。君彼春宮者高野天王也。以上、『春日御社御本地并御託宣記』

鹿嶋大明神、持統天皇五年卯、所々令尋御在所給之比、同十年、添上郡春日野ニ母御神速日神ト共、御坐。其御形

ノ甚美麗御坐シテ、ヒカルホトナリケレハ、或舍人奉思懸之振舞ケレハ、彼母公思給ケルハ、女ノ身程ニ口惜キ

物ナシ、我カクテアラハ及恥辱事モコソトテ、深山之高峯不通人所住トテ、尋深山令出行給之時、彼舍人御

共追走參。爰如鳥飛令行給時、舍人發惡心成大蛇走參髮生河辺。其時以劔伐一切彼大蛇摧散給畢。其

後髮生山頂登住給テ、口惜キ物ハ女人也。我住遊所不可入女人、深重誓給。故彼山ハ女人不參詣也。所

謂一宮ハ武雷命、二宮ハ今母公神饗速日命、三宮ハ舍人水權明神也。斬大地劍ヲハ名曰鹿正劍、又号天雲劔。依

此因縁、春日二季御祭舍人調者、大明神為母敵間、以孝養之儀舍人サイナミ給謂示者也。爰聖武天皇御子安

陪親王春宮之時、天平二年庚午十二月三日、御惱付御、依勅宣召陰陽師大津連、七日令精進令占給、占申

云、「此ハ十死一生御病也」。重依宣旨尚々能可占申、其時占申云、「高大神・鹿嶋大明神御崇也。不説経之

力難免御。殊以最勝王経講讀可有其靈驗」。依之七大寺惣檢校僧行信并四人請僧合以五人請僧、奉講讀

之間、同十六日御平癒。即以同十七日、髮生山頂奉崇祭、每年二季為恒例、上件最勝王経奉講讀、同廿年戊建

〔資料紹介〕 京都女子大学図書館所蔵『神野寺縁起絵巻』

立神野寺<sup>ヲ</sup>云々。

〔『春夜神記』〕

これら記事は『神野寺縁起絵巻』(神野)と、内容が共通するばかりか、部分的には表現上一致または酷似するところも見られる。そして、『春夜神記』(春夜)の方が、『春日御社御本地并御託宣記』(春日)よりも一層、共通し酷似する。例えば次のように(以下、『春日御社御本地并御託宣記』『春夜神記』の引用に際しては、煩を避けるため、傍記された振り仮名や送り仮名を省略する)。

※網掛部は『春夜神記』の方のみに対応記事が見られる箇所、傍線部は『春日御社御本地并御託宣記』の方のみに対応記事が見られる箇所、前者は十数箇所あるのに対して、後者は一箇所だけである。

【神野】 持統天皇五年辛卯 鹿嶋大明神の御在所を勅して尋しめ給けるに (詞第一 9～10行目)

《春日》 鹿嶋大明神、持統天皇五年<sup>卯辛</sup>、所々令尋御所給

《春夜》 鹿嶋大明神、持統天皇五年<sup>卯辛</sup>、所々令尋御在所<sup>ヲ</sup>給之比

【神野】 同十年大和国添上郡春日野に母御神神饗速日命と共御座ます (詞第一 10～11行目)

《春日》 同十年<sup>壬申</sup>添上郡春日野<sup>ニ</sup>母御神共御坐

《春夜》 同十年、添上郡春日野<sup>ニ</sup>母御神速日神共御坐

【神野】 其御形甚美麗ましまして、最あてやかに渡らせ給けるを (詞第一 12～13行目)

《春日》 其形甚美麗御

《春夜》 其御形ノ甚美麗<sup>ニ</sup>御坐シテ、ヒカルホトナリケレハ

【神野】 母御神熟思ひ給けるは、かく深くも我を恋るものなれば、行末いかなるはしたなき事を□いたしてはつかしめを得ることもあらんと (詞第一 16～18行目)

《春日》 〔対応記事ナシ〕

《春夜》 彼母公思給ケルハ、……我カクテアラハ及恥辱事モコソトテ

【神野】 女程世に口惜ものはあらしかしと思ひ

《春日》 女身ハ口借者也

《春夜》 女ノ身程ニ口借キ物ナシ

【神野】 いかなる深山幽谷の人も通はぬ所こそ尋出してわか住所とせめとて

《春日》 我登深山高峯ナムト

《春夜》 深山之高峯不通人一所トナ

【神野】 彼舍人はかゝる御ありさまをほの間、あとより追走来りぬ

《春日》 彼舍人御共ニ追天走参ル

《春夜》 彼舍人御共ニ追走参

【神野】 鳥の飛かことく

《春日》 如飛鳥

《春夜》 如鳥飛

【神野】 悪心を発し、忽に大蛇と成て

《春日》 発悪心成大蛇

《春夜》 発悪心成大蛇

【神野】 追奉り、髪生河の辺にて既にまちかく成ける。その時、速日命、剣をぬひて、彼大蛇を伐ころし摧散し給

〔資料紹介〕 京都女子大学図書館所蔵『神野寺縁起絵巻』

けるとかや

(詞第二12～14行目)

《春日》 走參。髮生河辺ニシテ以劍切彼大蛇斬殺了

《春夜》 走參髮生河辺。其時以劔伐、切彼大蛇、擯散給畢。

【神野】 其後、髮生山の頂に住給ひて、我、女なれはこそかゝるあなつらはしくはしたなき事も出くれ、反く、口惜ものは女なりと思取て、夫より女を入ることをゆるさせ給はず

(詞第二14～16行目)

《春日》 其後髮生山頂住給へり

《春夜》 其後髮生山頂登テ住給テ、口惜キ物、女人也。我住遊所へ不可入女人、深重誓給

【神野】 故に、彼山上へは今に登ることを恐て、多く麓の里の流にて手洗口漱、明神を拝し奉りける

(詞第二16～18行目)

《春日》 「対応記事ナシ」

《春夜》 故ニ彼山へ女人不參詣也

【神野】 聖武天皇の御宇、安倍親王いまた春宮にわたらせ給けるに、天平二庚子の年十二月三日、親王御惱重らせ給

(詞第三1～2行目)

《春日》 聖武天皇御子皇安倍親王春宮御時、天平二年十二月三日、御惱付親

《春夜》 聖武天皇御子安陪親王春宮之時、天平二年庚午十二月三日、御惱付御シテ

【神野】 帝驚ましまして陰陽の博士大津の連に 勅して、七日の精進をなし占奉りけるに、奏して曰

(詞第三3～5行目)

《春日》 依勅宣「召陰陽師」大津速令、七日精進、令占天申云



《春夜》 依勅宣「召陰陽師大津連、七日令精進」令<sub>レ</sub>占給、占申云

【神野】 神野明神・鹿嶋明神の御祟也。法楽をなし奉らすは御惱御さはや給こと難からむ (詞第三五〜七行目)

《春日》 高大神・鹿嶋明神御祟也。不読経力<sub>レ</sub>難免御煩

《春夜》 高大神・鹿嶋大明神御祟也。不読経之力<sub>レ</sub>難免<sub>レ</sub>御

もちろん、一方では、『春日御社御本地并御託宣記』に

一宮 武雷命

二宮 母御神 甕速日命

三宮 舍人 水摧明神也

斬大地劍名曰鹿正劍、又名天靈劍

と見え、『春夜神記』にも同様に掲げられる記事が、『神野寺縁起絵巻』には全く見られない。逆に、舍人の心情については、『春日御社御本地并御託宣記』でも「舍人依奉 思係」「発悪心」、『春夜神記』でも「舍人奉思・懸之」「発悪心」と、ごく簡略に記述されるに過ぎないが、『神野寺縁起絵巻』では、

・ 舍人成ける者、ふと懸想し奉り、寝ても寝ても□まも御すかたの忘れぬ俣に、春は春日野の花に深き思ひのいろをあらはし、秋は高円の月に強而なうて移り行浪をかこちければ (詞第一 13〜16行目)

・ 舍人大に怒りををこし、我をかくまてうとみ給こそやすからねと悪心を発し (詞第二 9〜10行目)

と、詳しく具体的に描写されている。あるいは、甕速日命が逃げてゆく様子や大蛇の形状についても、『春日御社御本地并御託宣記』『春夜神記』には見られない記述が、

・ 三笠山のかたそはを分行給けるに、九折なる山ちの木ふかくたちを、ひて、澗の水音、峯の松風など物すこけな

るにたとり行給ふ

(詞第二4～6行目)

・荊棘ともいはず踏つ分わいそかせませられければ

(詞第二8～9行目)

・両の眼かゝちのことく、紅の舌を巻、吹いき雲霧をなして追奉り

(詞第二10～12行目)

と盛り込まれている。『神野寺縁起絵巻』では、両書に比して、特には登場人物の心情や行動をより豊饒に叙述しているのであつて、記録性よりも物語性が強くなつていゝと言えようか。

このように、一方で差異も決して小さくなく、その間に一定の距離があることを感じさせるのも確かであるのだが、それでも、右に挙げてきた対応箇所から見ると、『神野寺縁起絵巻』は、『春日御社御本地并御託宣記』特には『春夜神記』と、かなり近い位置関係にあるものと捉えて間違ひあるまい。それらと直接の関係にはないものの、それらの所載記事がかなり忠実に継承・伝承される過程で派生してきたものである、とは言えようか。

\*

『神野寺縁起絵巻』を、『春日御社御本地并御託宣記』『春夜神記』所載記事と比較する時、それらに全くないまとまつた記事として最初に目に付くのは、その詞第一前半の、序に相当する部分である。先述通り、代々の天皇が都としてきた大和国では、仏教が伝来して以降それに対する崇敬が殊に厚かつたと述べていて、そのあとに「茲に髮生山神野寺の来を考に」(詞第一7～8行目)と続ける。そのような内容・記述は、『春日御社御本地并御託宣記』にも『春夜神記』にも全く見えない。この前置き箇所のことには、先に見た通り、それら両書に載ると基本的に共通し、部分的には表現上も一致・酷似する内容・記述が続いているのである。『春日御社御本地并御託宣記』『春夜神記』に載る

ような言わば甕速日命遷座伝承の前に右の如き記事を置いて、同伝承そのものではなくて、それと一連の「髮生山神野寺」の「来」由来・縁起の方を解き明かしたものとして殊更提示しようとしているのだと見られよう。内題・外題などないのに、冒頭に触れた通り、本絵巻を収める桐箱に「神野寺縁起絵巻」と印刷した紙片が貼付されているのは、その点を捉えた結果なのであろう。

ところが、誠に奇妙なことに、右の前置き箇所のと最後まで、ついに神野寺が登場することはない。同箇所末尾に「茲に髮生山神野寺の来を考に」と宣言しておきながら、その神野寺が全く出てこないのである。さらに、最後の部分、詞第三のあり方自体も誠に奇妙である。詞第三は先述通り、神野山に遷座した甕速日命すなわち神野明神と鹿島明神の崇りの伝承を記しており、安倍親王が重病に陥った際に、大津連が、崇りであつて法薬によらなければ治病は難しいと占つた、と伝える。しかし、そこまでで、結果、法薬が行われたのか否か、親王の重病が治癒したのか否か、全く記述されていない。あまりに中途半端な終わり方なのである。

実際、先引『春日御社御本地并御託宣記』『春夜神記』では、

・……「高大神・鹿嶋明神御崇也。不誦経力難免御煩」<sup>云々</sup>と占申り。而又占申<sup>云々</sup>、「奉講讚最勝王経、講讀者其靈験御歎」申。因茲<sup>云々</sup>以七大寺惣檢校僧都行信并僧四人、已上五人請位、件件最勝王経奉講讚問御平諭。仍以同十七日「髮生山頂奉崇祭」、毎年二季為恒例、上件最勝王経奉以講八講々讚。同十二年建立神野寺<sup>云々</sup>。

・……「高大神・鹿嶋大明神御崇也。不誦経之力難免御。殊以最勝王経講説可有其靈験」<sup>云々</sup>。依之「七大寺惣檢校僧行信并四人請僧合以五人請僧、奉講説之間、同十六日御平癒。即以同十七日「髮生山頂奉崇祭」、毎年二季為恒例、上件最勝王経奉講説、同廿年<sup>戊子</sup>建立神野寺」<sup>云々</sup>。

というように、大津連の占いのあと、それに従つて行信らによる最勝王経の講説が行われ（破線部）、安倍親王の重病

が平癒したことが記されている（実線部）。さらに最後には、そのことが神野寺の建立へと繋がったことが示されている（波線部）。これら両書と同様の記述に及んでいて、最後の神野寺建立を一層大きく取り上げていたならば、『神野寺縁起絵巻』は、仮に付されたその書名に相応しい、「……茲に髮生山神野寺の来を考に」の前置きと首尾一貫する内容となったことだろう。ところがなぜか、そうはならず、あまりに中途半端な形で終わってしまったのである。

絵巻制作終了当初には首尾一貫したものであったのが、その後の何らかの事情により、途中で物理的に切断されてしまった結果である、というようなことではなさそうである。後掲の本絵巻の絵3の写真の右端に、絵と一行近くの間隔を置いて詞第三の末尾が見られるが、最終行「からむと奏しけるとそ」の左に本来さらに何行か続いていたのが切断されてしまつて絵3と継がれているのだとしたら、絵3との間に一行近くの間隔があるのだから、そこに最終行の次の行の文字がたとえ一部でも見えるはずだろう。が、そういうものは全く見当たらない。また、絵巻の制作者が自ら新たに「……茲に髮生山神野寺の来を考に」という前置きを加えたいうえで、神野寺建立に至る直前のところで殊更叙述を打ち切る、というようなことも考え難いだろう。<sup>(3)</sup>

あれこれ思い巡らして結局、可能性の最も高いものとして想定し得るのは、次のような事情ではなかったらうか。「……茲に髮生山神野寺の来を考に」という前置きをすでに加えた、しかしまだ絵巻の形態をとつてはいない何らかの形の神野寺縁起が存在していて、それに基づいて絵巻化がなされたのが『神野寺縁起絵巻』であったが、その基づいたテキストが何らかの事情により末尾の欠損したものであったため、肝心の神野寺建立に至らない、中途半端に終わる絵巻になってしまった。あるいは、「茲に髮生山神野寺の来を考に」に至る前置きをすでに備え絵巻化もなされた神野寺縁起絵巻があつて、それに基づき書写したのが京都女子大学図書館所蔵『神野寺縁起絵巻』なのだが、もとの絵巻の末尾部が何らかの事情により欠けていたため、不完全な結末のものになった、ということも考えられようか。なお、

後掲翻刻の通り、同絵巻の詞には何かに基づいて書写した際の誤写かと思られる箇所が見える。

右のうちの後者の想定は、影印を後掲した絵の部分のあり方と照応するだろうか。詞第一に続く絵1は、舎人が喪速日命の様子を窺う場面かと見られ、詞第一の内容と対応する。しかし、詞第二に続く絵2は、舎人が喪速日命に言い寄っている場面を画いているようで、詞第二の内容と対応しない。絵1が冬の情景であるのを受け、絵2では季節が一つ進んで桜と柳を中央に据えた春の情景になっており、詞第一の中の記述「春は春日野の花に深き思ひのいろをあらはし」(14〜15行目)と特に対応するようでもある。詞第三に続く絵3は、さらに二つ季節が進み秋の情景で、前半は山路を急ぐ喪速日命と追う舎人、後半は舎人の変身した大蛇を剣で切り殺す喪速日命を画いていて、詞第三とは全く対応せず、詞第二全体の内容とまさに合致している。このように、詞と絵がずれているのだが、先に想定したように基づいた絵巻が詞第三の途中で途切れたものであったとすれば、詞第三に続くべき絵がなかったために、詞第二に対応する絵を詞第三のあとに置き、詞第二のあとには詞第一に対応する絵を置くことになったのだと、そのずれに一応の説明を加えることができよう。先のうちの後者の想定の方が可能性としてより高い、と言ってよからうか。

\*

ところで、伏拝村の神野寺については、飛鳥様式の銅造菩薩半跏像(重文、伝如意輪観音像、奈良国立博物館寄託)を所蔵し、早く『三代実録』元慶四年(八八〇)十一月二十九日条にその名が見えることが知られるものの、縁起を記した古い文献は伝存していないようである。猪熊兼繁氏は神野寺について「文化五年及び明治十年の両度の火災で古記を失つてゐるため寺史は分明しない」と説き、<sup>4)</sup>「村内の史料は各方面共一応はくまなく当った」(72頁)という『豊

原村史』(昭35 豊原村は、神野寺の存する伏拝村ら十村が合併して明治二十二年に成立、東山村・波多野村と合併して昭和三十一年に山添村となった)は、寛文三年(一六六三)の『和州山辺郡堂前村之内伊賀見村之絵図』に神野寺の「本堂」や「大明神」が描かれていることを指摘したあと、「江戸中期になると神野山・神野寺に関する記録は全くない」(201頁)と述べるし、日本歴史地名大系『奈良県の地名』「神野寺」条も縁起に関しては「由緒書(江戸末期と推定)に天平二年(七三〇)行基による創建と伝える」と記すのみである。そんななかで、江戸中期写と見られる『神野寺縁起絵巻』が出現したことは、同寺の縁起伝承を検討するうえで少なからぬ意義を有するだろう。

そして、神野寺についての、従来知られるほとんど唯一の縁起書類と言うべき右の江戸末期頃「由緒書」<sup>(6)</sup>が、その冒頭に

大和国山辺郡髮生山一心院神野寺儀者、人王四十五代聖武天皇御宇天平二<sup>庚</sup>年、行基菩薩始而太子御腦平癒<sup>2</sup>御祈祷、速<sup>三</sup>御平癒被為有候。

と記す点、注意される。聖武天皇の天平二年、行基が太子の病悩を祈祷し平癒させたのに始まると説いているようだが、それは、『春日御社御本地并御託宣記』『春夜神記』の詞第三相当部が先引通り、甕速日命が神野山に遷座したあととやはり聖武天皇の天平二年のこと、やはり太子すなわち春宮であった安倍親王が重病に陥った際、神野大明神(甕速日命)・鹿島大明神の崇りだとする大津連の占いに従って、行信らが最勝王経を講読すると平癒し、結果、神野寺が建立されるに至った、と伝えるのと、対応するものに違いない。「行基」は、「行信」の誤伝だろう。甕速日命遷座伝承が末尾に神野寺の建立に言及していたのを、江戸末期頃には同寺の正式な「由緒」として位置付けているのである。

京都女子大学図書館所蔵『神野寺縁起絵巻』は、右のような言わば甕速日命遷座伝承の神野寺縁起化が、より早く江戸中期には成し遂げられて、しかも、その縁起が豊かに華やかに物語られ絵巻に作成されてもいたことを、明証

するものということになる。さらに、先に想定した通り同絵巻の基づいた絵巻が存在していたのだとすれば、同絵巻よりもどの程度か遡った時点ですでに、同様の神野寺縁起化が行われ、あるいは縁起絵巻化も遂行されていたはずである。なお、大東延和氏「春日史点描―最近の研究メモより」(『秘儀開封春日大社 生きている正倉院』角川書店、平7)は、『春日御社御本地并御託宣記』『春夜神記』に載る、「鹿島の神タケミカズチが母神ミカハヤヒを訪ねて春日野にこられたとき、お供の舎人(とねり)が美しい女神ミカハヤヒに想いをかける。……」という先引伝承を、「一般のガイドブックに書かれている、鹿島から白い鹿に乗って御蓋山(みかさ)にこられた、という伝説とは別」の、「もうひとつの春日鎮祭説話」と位置付けておられる。そう捉えるならば、右の甕速日命遷座伝承の神野寺縁起化・縁起絵巻化は、そうした春日鎮祭説話の神野寺縁起化・縁起絵巻化であるとも言えることになろう。

こうした神野寺縁起化・縁起絵巻化は、当然、神野寺あるいはその周辺で成し遂げられたものと見られる。『神野寺縁起絵巻』の中に、

多く麓の里の流にて手洗口漱、明神を拝し奉りける。仍今、此さとを伏拝村といふ。又、此さとに手水川有なり。

(詞第二17、19行目)

と、『春日御社御本地并御託宣記』『春夜神記』には見られない、神野寺のある伏拝村の地名起源伝承や同村の手水川についての記事が加えられているのは、右のことを裏付けるものであろう。

なお、右の神野山とは別に春日大社東方の春日山にも、甕速日命等を祭神とする、春日大社の境外末社・神野神社(髪生社)があり、また、例えば『奈良名所八重桜』巻四(板本地誌大系)に

神野社一かみのやしらの宮二のみやの宮三のみや……此三ツの宮よりはるか南へゆきて神野寺かうのてらのあと有。石塔せきたうなと少々残れり。是は仁皇四十代の帝天武天皇の御皇子一品みかとてんむてんわう舎人親王天平七年霜月乙丑日行年六十にして薨こうし玉ひしを、……御姫君ひめきみ

父の御わかれを悲しみたまひ、翠の髪をそり落し柴の庵をむすひ神野寺と号し、年ひさしくおはしまし臨終正念に往生とけさせられし所なり。

と記されていて、寺跡は不明であるようだが、神野寺が存在していたようであることが知られる。さらに、先掲の尊經閣文庫所蔵本でなく春日大社所蔵本の『春夜神記』では、「一 神野大明神御事」と項目名を掲げた下に「大和国宇多郡伊賀国堺在之」と注記されているが、そこに示された神野大明神の所在地は、伏拝村とも右の春日山とも異なる。こうした状況であるので、『神野寺縁起絵巻』の言う「髮生山神野寺」や「神野明神」は先述通り、伏拝村に所在するものであることがその記述から明らかであるが、『春日御社御本地并御託宣記』『春夜神記』所載の甕速日命遷座伝承に言う「髮生山」や「神野大明神」「神野寺」がどこを指しているのか、特定し難いところがあるのである。それで、例えば、『神道大系』神社編「春日」の「解題」（永島福太郎氏）は、「興福寺が神山春日山の支配を企図したところ、『神野大明神根源』を社司につくらせたともいえる」（20頁）「神野大明神縁起は興福寺の春日社ないし春日山支配の論理をかかげたものである」（34頁）と記していて、それらを春日山にあるものと捉えているようだが、一方で大東延和氏『春日の神々への祈りの歴史』（私家版、平7）は、『春日御社御本地并御託宣記』所載「神野大明神根源」について、「当社（＝春日山の神野神社：引用者注）の伝承というよりは多分、奈良県東北山中の神野山にまつわるもので、当社は神野山の遙拝所、ないしは神野山から勧請された分社である可能性も充分にある」と述べているし、春日大社社務所編集『春日の森の昔ばなし』（春日大社、昭56）では、「その一 恋をした神さま」と題して甕速日命遷座伝承に基づく話を最初に掲げて、「……やがてその山頂に、タケミカズチ、ミカハヤヒ、トネリを祭った社が建ちました。ウノ社」と呼ぶこの神社は奈良県の東の山間部だけでも数か所もあつて、どれが最初にできた社か、はっきりしません。が、ともかく今の春日大社から東方の山の中としておきましよう」と処理する。甕速日命遷座伝承に言う「髮生山」



や「神野大明神」「神野寺」が仮に、本来は伏拝村以外のところにあるそれらを指し示していたのだとすれば、同伝承を神野寺縁起化・縁起絵巻化する際に、本来の理解を廃して伏拝村にあるそれらへと捉え直していることになる。

\*

「たまたま閲覧した国立公文書館内閣文庫所蔵江戸前期頃写本『春日四所大明神記』（『春日神記』、奈良県立図書館蔵）にも、右引『春日御社御本地并御託宣記』以下に載る瓊速日命遷座伝承と同様の内容が記述されているのが目にとまった。<sup>⑨</sup> 次の通り。

神武天皇当<sup>三</sup>元年<sup>一</sup>、常陸国鹿嶋宇海山<sup>三</sup>焼速日命御遷

幸マシマス。爰<sup>ニ</sup>一千二百八十余年<sup>ヲ</sup>経テ、持統天皇即位当<sup>三</sup>五年<sup>一</sup>

大長六年辛卯<sup>(マ)</sup>焼速日命所々御宿所マシ<sup>レ</sup>テ大和国宇太

神宮<sup>ニ</sup>御遷幸、大化元年乙未宇太ノ神野宮ヨリ所々深山勝

5地<sup>ニ</sup>尋入セタマイ、三笠山<sup>ノ</sup>勝地<sup>ニ</sup>差テ御遷幸ノ時、焼速日命

御形甚以テ美灑<sup>(マ)</sup>ニ御座、着<sup>ニ</sup>七珍宝衣<sup>ヲ</sup>治旦ノ匂ヲ薰<sup>ア</sup>天地

輝<sup>カ</sup>ケレハ、或舍人奉<sup>レ</sup>思<sup>レ</sup>懸<sup>レ</sup>之。彼母君神思食ケルハ、女神ノ

身程口惜キ物ハナシ。我カクアラハ及<sup>レ</sup>恥<sup>ニ</sup>事ヤ可<sup>レ</sup>在下<sup>ト</sup>テ、深山ノ

高峯<sup>ニ</sup>不通<sup>レ</sup>人<sup>ノ</sup>所<sup>ニ</sup>宮居セントテ、髮生<sup>ノ</sup>山顛<sup>ニ</sup>令<sup>ニ</sup>出<sup>キ</sup>行<sup>一</sup>

10玉フ。時彼舍人向<sup>サキ</sup>急<sup>チ</sup>追<sup>ミ</sup>走<sup>ル</sup>。速日命<sup>ニ</sup>飛行自在

〔資料紹介〕 京都女子大学図書館所蔵『神野寺縁起絵巻』

疾雲乗鳥ノ飛コトク令飛行<sup>トコトキ</sup>。舍人大怒<sup>イタ</sup>発<sup>ツ</sup>惡心<sup>アクココロ</sup>大蛇<sup>オホヘビ</sup>。

ナリテ、髮生河辺ニ走參ル。謂岩瀨河是ナリ。其時武甕

槌命カノ大蛇ヲフセキテ宣曰、「汝水摧強盜ナリ」ト言テ、

釵<sup>ツバ</sup>以彼斬<sup>ツ</sup>大蛇<sup>オホヘビ</sup>寸<sup>ツタ</sup>摧散<sup>ツ</sup>。底津下ニ遠治玉フ。以故<sup>ユヘ</sup>ニ

15 其ノ所<sup>トコロ</sup>名地獄谷<sup>ジゴクヤ</sup>。此因縁ヲモツテ彼舍人惡心<sup>アクココロ</sup>為<sup>ナ</sup>レ不<sup>レ</sup>

<sup>レ</sup>發<sup>ル</sup>。五十四代仁明天皇嘉祥・貞觀ノ比ヨリ二季ノ春日祭始ルナリ。

彼舍<sup>ハ</sup>欠損<sup>ケツ</sup>大明神御母君敵タル故、御母君孝養<sup>コウヤウ</sup>儀式<sup>ギシキ</sup>

以テ、舍人対治摧散ノイワレヲシメス者也。彼ノ大蛇斬玉フ

釵ノ名、龜正ノ釵ト申、亦<sup>モ</sup>天雲ノ釵トモ申ス。此釵岩上布留ノ

20 神体是ナリ。髮生大明神二社。一宮武甕槌命、二宮速日神。

<sup>四十三代</sup>元明天皇即位当二年<sup>ニ</sup>和銅元年戊申六月廿一日、髮生山顛<sup>ニ</sup>

宮居住賜。兼和銅ト景雲ノ間六十年以前ナリ。

其後、四十五代聖武天皇御子安倍親王、天平聖宝二年庚午

十二月三日御惱<sup>ニ</sup>ツキ、同十七日宣旨<sup>ニ</sup>ヨツテ、彼ノ舍人水摧神

25 クワヘテ三所宮柱立、髮生大明神号者也。

この記事について、今は充分に論じるだけの準備なく、気の付いた点のみいくつかメモしておくに止めたい。

例えば7〜12行目のあたり、先引『春夜神記』の記述に特に近い。先述通り、『神野寺縁起絵巻』の場合もやはり『春夜神記』の方に特に近似していたのであって、甕速日命遷座伝承における『春夜神記』の位置の大きさを窺わせよう。

その一方で、『春夜神記』や『春日御社御本地并御託宣記』さらには『神野寺縁起絵巻』いずれとも異なる内容も、少なからず認められる。例えば、甕速日命が三笠山に至るまでの経緯（1～5行目）は、それら他文献には記述されていない。また、舎人の化した大蛇を切るのが、甕速日命でなくて武甕槌命になっている点（12～14行目）、特に目に付く大きな相違である。二季の春日祭について「彼舎（八八）大明神御母君敵タル故、御母君孝養儀式<sup>ヲ</sup>以テ、舎人対治摧散ノイワレヲシメス者也」（17～18行目）と記すのも、特異である。さらに、髪生河について「謂岩瀕河是ナリ」（12行目）と記し、あるいは「底津下<sup>コ</sup>遠治玉フ。以故<sup>コ</sup>其所<sup>コ</sup>名地獄谷」（14～15行目）と言うのも、他文献にはないものである。なお、後者の「地獄谷」は、『豊原村史』所載「豊原村各大字地名表」に、「伏拝」にある大字地名として「ジゴク谷」が挙げられているのに、相当しようか。

このように、『春夜神記』所載伝承をかなり直接的に継承する面が見られる一方で、同書を含む他文献とは異なる面を種々持つともいるのである。甕速日命遷座伝承が、『春日御社御本地并御託宣記』特には『春夜神記』の系統を基軸として受け継がれつつも、他方ではかなり変容し揺れ動いている姿を見て取ることができよう。そういう状況の中で、先に見たような同伝承の神野寺縁起化・縁起絵巻化という現象も生起してきたのかもしれない。そんなことも、右記事は想像させるだろうか。

## 注

（1）神野山について、猪熊兼繁氏「神野山考」（『大和志』四卷十一号、昭12）や大和高原文化の会編集発行『大和高原歴史ウォーク』（平26）など参照。なお、神野山は天狗伝承の山でもあつて、斎藤純氏「天狗さんの石合

戦—奈良市近傍の『山の争い伝説』—（竹原威滋氏他編『奈良市民間説話調査報告書』、平16）に詳しい。

(2) 小田基彦氏「春日の山」(『歴史手帖』128号、昭59)。

(3) 前出臨川書店発行目録は、「絵が全て夔速日命と舎人の話にまつわるものであり、また本文も唐突に途絶えることから、本書は神野寺縁起の中でも、この話題の部分を抜き出して一軸の絵巻に仕立てたものであると想定される」とする。ただ、そのような「抜き出し」を意図的に行ったのだとしたら、「この話題」とは無関係な「茲に髪生山神野寺の来を考に」に至る冒頭の前置き部分も削除するのではないだろうか。

(4) 注1猪熊論文。

(5) ただし、今西忠男氏「神野寺について」(『大和史学』三卷三号、昭和42年)に、縁起に関する記事は含まないが、元文二年(一七三七)の『口上書』が引用されていたりはする。

(6) 注5今西論文所載。

(7) 春日顕彰会編集発行『春日大社古代祭祀遺跡調査報告』(昭54、56)や後出大東延和氏『春日の神々への祈りの歴史』参照。

(8) 注2小田論文などが指摘する。

(9) その他にも、注1猪熊論文は、『春日御社御本地并御託宣記』や『春夜神記』に載るのとは異なる面のある「神野大明神の縁起」に言及するが、詳細は未確認。精査し得ていない天理図書館保井文庫所蔵関係文献なども含めて、さらに検討し補説できればと思う。

※引用に際しては、基本的に通行の字体に改めるほか、句読点を変更するなどしている。



絵 1 < 冬の情景 > 喪速日命の様子を窺う舎人

【影印・翻刻】京都女子大学図書館所蔵『神野寺縁起絵巻』

- ・ 影印は絵の部分のみで、臨川書店より提供頂いたものである（本稿冒頭部参照）。高配賜った臨川書店に対しまして、記して深謝申し上げます。
- ・ 翻刻に際しては、基本的に通行の字体に改めた。
- ・ 判読不能箇所は、□で示した。誤読等を含んでもいよう。今後の補正を期したい。
- ・ 私に句読点や引用符合を施した。
- ・ 行送りは元のまま、五行ごとに行番号を行頭に付した。

夫仏法東漸せしより、世々、帝を始奉り下

万民にいたるまで、貴賤となく崇敬のころをさしを  
傾さるはなし。就中大和国は、皇祖

神武天皇橿原に皇居の地をしめ給しより、相つゝひて

5 聖帝明王の都となし、地厚く民穩にして、

勅願寺御願所を並て国中に綿連たり。宝鐸

農闍（農分） 励甲起深信志 洪鐘曉夢 驚無名長夜夢 茲に

髮生山神野寺の来を考に、

持統天皇五年辛卯 鹿嶋大明神の御在所を



絵2 〈春の情景〉 喪速日命に言い寄る舍人

10 勅して尋しめ給けるに、同十年大和国添上郡春日

野に母御神神（イマ）喪速日命と共御座ます。母御神速日

命、其御形甚美麗ましまして、最あてやかに渡らせ

給けるを、或時、舍人成ける者、ふと懸想し奉り、寝ても寤ても

□まも御すかたの忘れぬ俣に、春は春日野の花に深き思ひ

15 のいろをあらはし、秋は高円の月に強而ならて移り行浪を

かこちければ、母御神熟思ひ給けるは、かく深くも我を恋る

ものなれば、行末いかなるはしたなき事を□いたしてはつかしめを

得ることもあらんと、最みそかに春日のさとを出給ける。

以上、《詞第一》

(絵1)

然るに、速日命は、住馴給ける春日野をはなれて、いつれ

の所に住へき給はん、女程世に口惜ものはあらしかしと思ひ、

此上はいかなる深山幽谷の人も通はぬ所こそ尋出してわか

住所とはせめとて、三笠山のかたそはを分行給けるに、九折

5 なる山ちの木ふかくたちをへひて、澗の水音、峯の松風など

物すこけなるにたとり行給ふ。彼舍人はかゝる御ありさまを

ほの聞、あとより追走来りぬ。是を 速日命はいとうたてき

事に思取て、鳥の飛かごとく、荊棘ともいはず踏分（イマ）いそかせら

ければ、時に舍人大に怒りををこし、我をかくまてうとみ



絵3 <秋の情景>

舍人の化した大蛇を剣で切る甕速日命

山路を急ぐ甕速日命と追う舍人

10 給こそやすからねと悪心を発し、忽に大蛇と成て、両の

眼かゝちのことく、紅の舌を巻、吹いき雲霧をなして

追奉り、髮生河の辺にて既にまちかく成ける。その時、

速日命、剣をぬひて、彼大蛇を伐ころし摧散し給ける

とかや。其後、髮生山の頂に住給ひて、我、女なればこそかゝる

15 あなつらはしくはしたなき事も出くれ、反く口惜ものは

女なりと思取て、夫より女を入れることをゆるさせ給はず。故に、彼

山上へは今に登ることを恐て、多く麓の里の流にて

手洗口漱、明神を押し奉りける。仍今、此さとを伏

拝村といふ。又、此さとに手水川有なり。

(絵2)

以上、《詞第二》

其後 聖武天皇の御宇、安倍親王いまた春宮にわたらせ

給けるに、天平二庚子の年十二月三日、親王御惱重らせ給

により、いかなる御事かと 帝驚ましまして陰陽の博士

大津の連に 勅して、七日の精進をなし占奉りけるに、奏

5 して曰、「此御惱はまさしく 神野明神・鹿嶋明神の

御祟也。法楽をなし奉らすは御惱御さはや給こと難

からむ」と奏しけるとぞ。

(絵3)

以上、《詞第三》

(本学教授)